

している部分である。あくまで、「カタチ」に示される「モノ」にこだわり、それを追求する姿勢を貫いてきた神野の態度であるが、ではなぜ「処理」するところまで記述しなかったのか。「モノ」を中心に据えるならば、それを「作り」「祀り」そして「処理する」ところまで見て始めて、その「モノ」に対してアプローチできうるのではないだろうか。例えば、新潟県東蒲原郡の事例に関して言えば、一年前の「ショウキサマ」は、そのままその場で放置される。なぜ、焼かれず、また流さず、その場に放置したままであるのか。実際、大牧という地域では焼くことに関しての禁忌まで伝えている人にも出会うことができた。その位置づけはどうか。

いったん、巨大な霊力を持ちえた「人形道祖神」であるが、一年経つ度に新しく作り替えられてしまう。では、その霊力を持ったまま放置される人形道祖神に対しての扱いはどのようなものなのか。ひとたび聖性をまとったモノがつけてしまう、「曖昧なケガレ」のような意識はあるのか、人々の意識はどのように動いているのか。調査地を絞った他との民俗事象との比較を含めた地域研究がまだこの「人形道祖神」について今後はより必要になってくると思われる。

最後になるが、課題の一つに、海外との比較も挙げられていたが、その一つとして、中国における「石敢当」を考えて良いと思う。この境を守る表象物の存在は、日本にも見ることができ、ほか、中国大陸、台湾、沖縄とアジアに広く分布していることが報告されている。この比較もまた、人形道祖神論においては、非常に興味深い事例の一つであろう。だが、当然であるが、日本社会における「境」と、他国における「境」の違いを厳密に把握してから、両者の比較を試みる必要がある。台湾では、日本における「村境」が見えない、という報告もされており、十分注意して比較を試みねばなるまい。

以上、本書の内容と論旨を紹介し、若干ではあるが、私見と、比較研究における視野を述べてみた。しかし私事を途中に含めなどし、ややまとまりのかける文章になってしまった。私の読み違いなど、どうか至らない点はご容赦いただきたい。本書によって、神野は人形道祖神の定義を提示したのであり、その定義の検討も含め今後我国における道祖神研究はさらなる発展を遂げることと思われる。我々は神野の業績を受けとめ、新たな道祖神研究を展開していかねばなるまい。

(白水社 1996)

参考文献

- 木内裕子 1988「境の見えない「村」」『文化人類学』5 アカデミア出版
菊池健策 1997「書評：『人形道祖神』」『日本民俗学』210号 日本民俗学会
周星 1993「中国と日本の石敢当」『比較民俗研究』7 筑波大学 歴史・人類学系 民俗学研究室
高橋典子 1997「書評：『人形道祖神』」『民具研究』115号 日本民具学会
徳丸亜木 1992「『信仰民具』と神祭りの場」『日本民俗学』191号 日本民俗学会
柳田国男 1934「神送りと人形」『旅と伝説』7巻7号

韓国比較民俗学会編

『韓国の民俗と性』

金 花子*

本書の構成は次のとおり。

序

1章 文献節話における性の受容の様相とその意味—崔 雲植

2章 タルチュム(仮面舞踊)に形象化され

※筑波大学大学院地域研究研究科

ている性の民衆的認識と変革的性格—林 在海

3章 民間信仰から見た性—張 壯植

4章 セシノリ(歳時遊び)における性の象徴体系—尹 光鳳

5章 春画の芸術史的展開と意義—崔 仁学

6章 韓国口承猥褻の概括—金 献宣

7章 ヒンズー民族と性—李 光秀(※研究者名は音訳で未確定)

序によると、本書は、(韓国)比較民俗学会が「民俗と性」をテーマに、1993年12月15日と1994年6月17日の2回にわたって発表した研究を収めたもので、父系社会の徹底した男尊女卑の思想と同姓(同本)不婚の原則に従って同族間の婚姻が禁じられた上に成立した韓国の伝統社会では、罵る言葉の最も酷いものは性との関係で発せられる言葉が多い。

一方で、性は豊饒を象徴し生産の意味を有しており、農耕民族にとって性は基層文化を成しており、これを排除しては民俗学は成り立たない。その意味において、学会が性を扱うことになったとある。

以下、各論文の要旨を紹介し、最後に所感を述べて書評に代えることにしたい。

1章の崔雲植論文は、『三国遺史』『三国史記』そして朝鮮時代の文献に伝えられている説話から性を表現する様式を見、性をどのように受容してきたかを考察したもので、性の表現様式は、象徴的表現と直接的表現に分けることができるとし、象徴的表現は、高句麗の建国始祖伝承や星を見て懐妊した姜邯賛將軍の話、瓜や岩で妊む説話のような、英雄の出生談に太陽や星が関係を見せる「天生観」的なものと、地母神信仰とも関係を見せ、性器または性行為を象徴する地上の(土地の)生成力に関する「地生観」的なものがある。

直接的表現には、性器に関するもの、性行為に関するもの、自慰に関するもの、動物と

関係するもの(獣姦)などさまざまなものがある。

性は人間の本性である。説話から意味を考えると、神聖視したり、禁忌にしたり、蔑視することから離れ、本質を肯定して男女の性的結合が恋愛から始まって結婚にまで進むものであることに注目しなければならず、そうすることによって人生と文化創造の力になるとする。

2章の林在海論文では、両班であろうが、一般庶民であろうが、老人であっても、若者であっても、人は誰も性的欲求から無縁ではいられない。そこから、性器と性行為を赤裸々に描写しようとするタルチュムが形成されるのである。タルチュムとは、性を素材として風刺と諧謔を通して現実社会の矛盾を批判的に示す仮面舞踊である。タルチュムには、性に関する否定的な認識と肯定的な認識、快楽追求に堪能する頹廢性と排泄器官としての不潔性、出産を担当する出産力と死を克服する生命力、上下あるいは男女差別の社会体制を反転させようとする変革性と観念の束縛から開放させようとする自由な発想などを、性器と性行為の赤裸々な描写を媒介として形成しようとする意味がある。

つまり、性は人間の等質性の確認にもつながり、上下、男女の差別観念から脱する上で最も適切な方法でもあって、性には、階級と理念、対面と権威などあらゆる社会的な境界をなくし、人間を一つにする属性をもつとする。

3章の張壯植論文は、性器信仰を取り上げて、1) 神体の類型、2) 儀礼の形態、3) 信仰対象物の素材の性格と表現技法、4) 儀礼方法、に分けて考察するとし、その上で性器信仰の史的流れを示す資料については、文献は少なく、遺物だけから歴史を読み取るのはむずかしいが、それに現在の民俗資料を加え、歴史

的脈絡の中で多角的に研究することによって、性器信仰の悠久な歴史的脈絡と強靱な生命力をもつ信仰性を確認することが可能であると。また、他の信仰との複合形態を見せることが多く、仏教信仰との習合、岩石信仰や童身信仰との関連、更には風水信仰との密接な脈絡をもつ。

そして性器信仰は生殖儀礼という側面から豊饒と多産の原理が、また人間存在の基本としての原理が認識され、そこから人間社会に生きる人としての本質に根差した儀礼としての目的をもつとする。

しかし、生産や豊饒など生産性を元にした性の神聖価値は徐々に薄れ、生産的価値より遊戯的価値や交換的価値に重点を置くのが支配的である、とする。

4章の尹光峰論文は、セシノリ（歳時遊び）をノドゥロプ・プライの循環原理と、東洋の易の原理を用いて研究したものである。

古代人たちは自らの意識中に刻み込まれた自然の秩序を遊び化した。プライはこのような自然の秩序を用いて文学理論を構築したが、その方法の一つが神話の循環原理である。すなわち、春、夏、秋、冬の循環が作品の様々の現象に当てはまるのを証明するため、春と夏は喜劇的動きに、秋と冬は悲劇的動きに分けて説明した。そして、自然の周期の半分をロマンスの世界と純真無垢のアナロジー（類推）と規定し、半分をリアリズム（事実そのまま）の世界と経験のアナロジーと規定した。

確かにズルダリギ（縄を引っ張る遊び）はプライの循環理論でも説けるし、ドンチェノリ（ノリは遊び。昼に行われる男性的な“陽”の遊び。秋に収穫が終わったら、男性だけの村の若者たちが二つの丸太を縄で巻いて作った車輪をもち、肩に乗せて戦い合う遊び）は輪廻思想であると共にプライの喜劇的動きの状況に当てはまる。しかし、歳時遊びは東洋の易の原理を付加することによってはじめて象徴体系が成立するのである。

例えばズルダリギ（綱引き）と女性だけのノツタリバキ（バキは足踏み。女性的な“陰”の遊び。満月の夜、村の女たちが手をつないで輪を作って足を踏みならして踊る）は陰陽に対応すると共に東洋の易の原理が働いている。その上で自然循環の原理、従って、ジシンバキ（地神踏み。楽器を鳴らす農楽遊び）は春、ギルノリ（道踏み遊び）は、夏、タルチュムノリ（仮面舞踊遊び）は秋、ズルダリギ（綱引き）は冬に対置できる、とする。

5章の金猷宣論文では、春画とは性を素材とした実際的な絵画である。その研究は、構成、象徴、信仰の素材にわたってなされるべきであるが、資料の把握が十分なされているとは言えず、全国の性信仰の資料、岩石刻画、彫刻などの収集ができるとき本格的研究が可能となるとし、また、韓国の春画の研究には、中国、日本との比較も必要である。春画としての作品の水準は韓国>中国>日本の順で、商品価値は逆であるとする。そして春画研究には芸術的な眼で見ることは欠かせない、と説く。

6章の崔仁学論文では、民話は伝承者減少の趨勢にあるが、猥褻説話の伝承者は今も少なくなく、300話クラスの伝承者も多い。そして民話の伝承者は村の老人であるが、猥褻説話は村の老人だけでなく、知識人、婦人層と各階層にわたっていると。とする。

内容に地域差のないものも猥褻説話の特色で、その量も多いので分類も容易で、20～30項目に整理できるとし、例えば次のように分類する。

- 1 神の生殖器創造型
- 2 後家の欲情型
- 3 牛肉か麦ご飯か型
- 4 醜くかった、可愛かった型
- 5 宣教師シリーズ
- 6 幼な新郎シリーズ

7 生殖器形態談

7章の李光秀論文は、韓国を離れてヒンズー民族を扱うが、古代インドにおいて、女性の生理、妊娠、生産は眼で見ることができるところで重視され、土と関連して地母神信仰の中に取り入れられ、ヒンズー民族の母神は生命を与えてくれる恩恵と慈悲の性格を有するものになったとする。

したがって、神は豊富な穀物（穀食）の母であり、子供を授ける“サムシンハルメ”（子供授けの神）となる。

ヒンズー民族は、生と死を一元論的認識の枠組みで見ており、生命を管掌するものは疾病からの保護を意味し、その大いなる力に尊敬の念を懐くが、その力は破壊と共に新しい創造を意味するのである、とする。

崔雲植論文（1章）は、文献、説話における隠喩的・直接的性描写を扱っているが、比較神話学や比較説話学的な分析もなく、フロイト流の心理分析も見られず、研究としては先行学説批判も新見もない単なる代表事例紹介と簡単なコメントのみに終わった感じがする。恐らく筆者は資料の収集と分類に優れていると思うのでその集大成に期待すると共に、比較民俗学的分析を加えてもらいたいと思う。

次の林論文（2章）は、テーマを絞った分、研究らしさを漂わせているが、全体的に踏み込み不足が感じられる。比較民俗学会の仕事である以上、世界の仮面舞踊との比較がないのはおかしい。しかし、韓国の代表的民俗芸能の分析としてはある程度成功しているとも

思われる。

張論文（3章）は、用語や論述スタイルは研究的であるが、意味論的分析だけに終始しており、内容的には概説の域を出していないように思われる。この研究も比較民俗学的視点のないのは致命的欠陥で、例えば中国の民間信仰などは極めて性的であり、それらとの比較を論じた上で、韓国伝統社会の性風俗と民間信仰の関係の分析に進んでほしかった。

また尹論文（4章）は、正攻法ではないが、切り込み方としてはあってもよい。ただし分析としては底が浅いと言わざるを得ない。「あそび」の原義を論じ、比較研究を進め、今日の変容を説くことが必要である分野で、その部分が皆無ではないが、循環原理に当てはまるか否かの作業に終始した感じがする。特に易の原理にも言及しながら、分析のための準備としての易の原理の説明が欠落しているのは批判されてもしかたないと思う。

金論文（5章）と崔仁学（6章）に至って、やっと比較民俗学研究に出会った感じがした。これは本書を読んで得た最大の収穫である。

最後の李論文は専門外なので省略する。

以上の研究対象は神話、説話、笑語から芸能、春画や猥談に及び、興味深い分析を施している。しかし、そこからどのような意味を読み取るかという答えを出すのに急であって、基礎研究が集約されたものとは言えない点に若干の不満を感じる。性文化に対する評論に終わることがないようにすると共に本格的分析の端緒となることを期待したい。

（知識産業社 1997, ソウル）